

中長期目標 (学校ビジョン)		夢や希望に向かい 自分らしく輝いて たくましく生きる力を育む ～「〇〇したい」と主体的に生きる姿を求めて～		今年度の 重点目標	・一人一人の可能性を広げる主体的で多様な学びの推進 ・社会と主体的に関わる自信と勇気を取り戻す豊かな体験の創造 ・「生きたい」を保障する教育活動・環境の整備 ・主体的な生き方を支える支援体制、連携の強化			
年 度 当 初						(9)月		
評価項目		評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
各学部の取組	小学部	児童が願いを抱き、人との関わりを広げながら意欲的に学ぶ授業づくり	・児童の実態に大きな幅があり、障がいが重度の児童も多い。個々の児童の実態やニーズを適切に把握するために、保護者や関係機関との情報共有を継続的に行っていく必要がある。 ・教育支援計画・指導計画の目標検討会やグループ学習の計画についてグループで話し合うことで、児童の実態に合わせた目標設定や支援を行うことができることが増えてきている。 ・単一会・重複会を定期的に行い、適宜学部全体で情報を共有し、学部の意見を集約することで、学部全体で児童を支援する意識が高まってきている。	・適切な目標設定や支援を行うことで、児童が人との関わりを広げながら、意欲的に学ぶ授業づくりを行っている。	・保護者や関係機関との連携を生かしながら、児童の「〇〇したい」という願いを大切にした授業づくりを行うために、児童の実態、目標、支援等についてグループで話し合いを行い、計画や実践に生かし、授業改善をしていく。 ・教育支援計画・指導計画の検討会を計画的に行い、子どもたちの実態や学習のねらいに応じて様々なグループ学習を展開し、児童が人との関わりを広げながら学ぶことができるよう支援を工夫する。 ・日頃から担任・副担任で子どもたちの実態や授業に関する情報交換を行うとともに、単一会・重複会で、職員間の連携を図り学部全体で児童を支援する体制づくりを行う。 ・学部で授業を見合い学ぶ機会や、学校全体の研修で学んだ授業づくりの工夫を学部で話し合う機会を設け、授業づくりに生かすようにする。	・保護者や関係機関との情報共有を行うことで、児童の「〇〇したい」という願いを大切にした授業づくりに取り組むことができてきている。児童の願いに基づき、地域の方との連携、学級間で学習のまとめを発表する機会を設定する等、授業改善に取り組んでいる。 ・教育支援計画・指導計画の検討をグループで行うことで、児童の実態や学習のねらいについて共通理解を図ることができているが、協議が不十分な面もある。 ・単一会・重複会・学部会等で、児童の様子を共通理解することができてきている。日頃の、子ども同士の関わり、教職員との関わりが広がってきている。 ・研究日に各学級の授業を見合う機会を持ち、授業づくりについて意見交換をすることができてきている。	B	・保護者や関係機関との情報共有を継続して行うと共に、単一会・重複会・学部会・目標検討会等の運用を工夫し、児童の実態や学習のねらいについて情報共有する機会を多く設定する。 ・適切な目標設定や支援を行うことができているか、授業に関する情報共有を行い、児童の人との関わりの広がりや意欲の高まりを大切にした授業づくりを行うことができるよう努める。 ・学部教職員の連携を深めながら学部全体で児童を支援する体制づくりをより一層進めていく。 ・引き続き、授業を見合う機会や研修報告等をする機会を設け、学び合いを授業づくりに生かしていく。
	中学部	生徒が自分の思いを言える、伝えられる、叶えられる環境づくりと授業づくり	・各教科の理解度や障がいの程度など、生徒の実態差が大きい。単一学級は不登校を経験している生徒が増加している。重複学級は、障がいの重度化と共に高度な医療的ケアを要する生徒が増えている。 ・生徒理解のために単一会や重複会を行っているが、授業予定や連絡事項について話し合われることが多く、授業を通した生徒の変容や各授業の評価・改善について話し合われることが少ない。 ・教科指導や自立活動の専門性向上、効果的なICT活用、実態に応じた教材・教具の活用など授業力向上に向けた努力が必要である。 ・進路学習について、様々な状況に応じて学習内容を考え、計画的に実施することが必要である。	・職員、生徒の8割以上が生徒自身から思いを発信したり、自ら行動したりすることが増えてきたと感じている。(単一) ・職員、保護者の7割以上が、生徒の実態や生活年齢に応じた学習や適切な集団学習の工夫ができたと感じている。(重複)	・日々の実践につながる学部研修を行う。また、定期的に単一会や重複会を実施するとともに、単重チームを中心として生徒の変容などを話し合う時間を設定する。 ・生徒が意見を言えたり意思表示しやすかったりする環境設定や雰囲気づくり、実態に応じた適切な教材を準備できるよう関係職員で随時確認を行う。 ・生徒がすべきことを自分で考えられるよう、指導と支援、受容と許容のバランスに留意する。 ・集団学習に関わる職員が生徒の目標を共有できるよう、事前の確認を徹底する。 ・生徒一人一人の病気や障がいにに応じた適切な支援を行うために、保護者・関係機関との連携を深める。	・定期だけでなく必要に応じて単一会を設定し、生徒について共通理解して指導できたことで、生徒に一定の変化は見られてきている。 ・継続して登校できない生徒に対する指導を見直す必要がある。 ・生徒の不得意教科に対する指導方法の見直しが必要である。 ・集団学習について、事前に計画案等は配布しているが、打ち合わせや確認は不十分である。また、担任が入っていない授業に関する評価についても課題が残っている。 ・固定した副担任が入っていないため、情報共有に難しさがある。	C	・各教科の指導方法や支援方法を紹介し合い、他教科での指導に生かしていく。 ・継続して登校できない生徒への指導について、関係職員で共通理解するとともに役割分担をして指導に当たる。 ・副担任や介助職員が授業のねらいを共有する。また、担任は生徒を見るべきポイントなどを担当職員へあらかじめ伝える。 ・評価について、授業担当者がその日に記入し、担任が確認できるようシートへの記入を徹底する。 ・1日を通して職員間の入れ替わりをできる限り少なくできるよう工夫する。
	高等部	夢や自分らしさの実現にむけて、生徒が主体的に自分の力を発揮できる授業づくり	・学部会、単一会、重複会の中で、生徒についての情報共有が行われており、日々の生徒との関わりに生かすことができている。生徒のニーズや目標、支援の確認や授業改善の視点を持った話し合いを継続的に行っていく必要がある。 ・外部講師との学習について、ねらいやバランス、教科とのかかわりを考えながら昨年度見直しを行った。3年間をめざす生徒の姿や学びの連続性について確認しながら見直しを持って学習を計画していく必要がある。	・生徒の夢や自分らしさの実現にむけて、授業や体験活動等の工夫・改善を行い、生徒が主体的に自分の力を発揮できる授業づくりや支援を行っている。	・生徒が自分の思いを伝えたり、自分の目標に向かって主体的に学習に取り組んだりすることができるよう、雰囲気づくりや学習環境の整備に努める。 ・生徒の実態やニーズに応じた適切な支援や教材の準備をすることができるよう、生徒の目標や支援方法について随時確認する機会を設ける。 ・めざす生徒の姿や3年間の学びの連続性について確認し、3年間を見通しながら学習を計画するよう努める。 ・授業改善の視点を持った話し合いを定期的に行うようにする。	・雰囲気づくりや学習環境の整備に努める中で、生徒が自分の思いや考えを伝えたり、体験活動に意欲的に取り組んだりする姿が多く見られた。様々な学習において、生徒がより自分の意見を伝えたり目標に向かって主体的に学習に取り組んだりできるよう、さらに環境整備を進めていきたい。 ・生徒の実態やニーズに応じた支援について、学部会や単一会、重複会、サポート会議等を通して話し合い、指導に生かすことができた。多様なニーズに対応した支援について、様々な機関とも連携をとりながらより進めていきたい。 ・キャリア教育の視点にたった3年間の学びの連続性について意識した授業づくりと個々の課題やつけたい力についての共通理解をより深めていく必要がある。 ・生徒についての情報共有はできているが、目標や支援方法の確認、授業改善の視点を持った話し合いは十分とは言えず、やり方もふくめて工夫が必要である。	C	・学習における生徒一人一人の目標を確認したり、各教科等での支援方法について話し合ったりする場を設定する。 ・関係職員が個々の生徒の支援についてより理解し、確実な支援につながるように、マニュアル等を作成して視覚的に確認できるようにするなど、情報共有の仕方について工夫する。 ・生徒の目標や授業の流れに関わる職員が確実に確認できるように学習計画を作成することを徹底する。 ・キャリア教育の視点にたった3年間の学びの連続性について確認すると共に、個々の生徒の課題やつけたい力について共通理解する時間を設け、授業に生かしていく。
一人一人の可能性を広げる主体的で	教務部	カリキュラムマネジメントの充実	・目標検討会により、児童生徒の実態について目標の修正や共通理解ができ始めている。個別的教育支援計画、個別の指導計画、年間指導計画で検討された個別の目標を指導計画等に繋ぎ、授業に生かす必要がある。 ・重複学級においては、国語、算数・数学の年間指導計画が無く、今年度作成予定である。	・各種指導計画が適切に記入されることによって、PDCAサイクルが機能している。 ・重複学級の国語、算数・数学の年間指導計画が作成されている。	・個別的教育支援計画、個別の指導計画、年間指導計画等の各種計画が前年度の評価を踏まえ適切に記入されているか、今年度の記入は適切か等定期的な声掛けとチェックを行う。 ・教員の負担を考え、作成の見通しが持てるような枠組みを整え提案する。	・個別的教育支援計画、個別の指導計画、年間指導計画等定期的な声掛けやチェックで記載内容の修正や確認ができた。しかし、個別の指導計画と年間指導計画、通知表等の評価について一貫性のないものや計画訪問で指摘を受けた出席の少ない児童生徒の評価についての記載が周知されていない現状がある。 ・重複障がい学級の国語、算数・数学の年間指導計画の枠組み(全体計画、個別の年間指導計画の見本)は整った。実際に運用しながら、意見をもらい使いやすいものに修正していく必要がある。	C	・引き続き定期的な声掛けとチェックを続けていく。 ・評価の書き方について個別に説明していく。 ・個別の評価を次年度の計画に生かすよう声掛けをする。 ・11月の職員会で提案するよう準備を進めていく。 ・提案時に記入例や留意点など丁寧に説明する時間を設ける。 ・使用していく中でアンケート等を行い、より使いやすいものに改善していく。
	授業づくり部	・主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり ・多様な学びを保障する効果的なICT機器活用	・昨年度、教科会と連携した授業実践の持ち寄りによる学び合いを行い、学習の流れとめあての明確化を進めた。T1の7割以上が実践し、指導や支援の見直し、めあてと対応した振り返りにつながりつつある。 ・昨年度、アンケートを基に、ICTミニ研修や端末活用による多様な学びについての授業づくり日研修等を企画した。教職員の情報活用能力向上につながるよう、引き続き企画の工夫が求められる。 ・児童生徒主体の多様な学びの実現に向け、実践を通した学び合いの継続とともに、全校での共通理解や連携、外部講師による指導助言の必要性が高まっている。	・研究日、授業づくり日での実践を通した学び合いが授業づくりの工夫・改善につながっている。(職員アンケート：7割) ・ICT研修が授業実践や児童生徒理解等に活かしている。(職員アンケート：7割)	・研究説明会で提示用カードを活用した学習の流れとめあての明確化、めあてと対応した振り返りについての共通理解を図る。 ・授業づくり日研修を病弱教育、肢体不自由教育CFやまなびのプロジェクト等と連携して企画し、年間の見直しを示す。 ・各ツールの活用による実態把握や目標設定に向け、研究日を活用し、演習を取り入れたミニ研修を設定する。 ・単一、重複会や職員アンケートによる声を研究日やICT研修等に反映させ、外部講師との連携を図る。 ・動画保存フォルダやClassroomを活用し、学び合いの情報共有を図る。	・説明会で学習の流れとめあての明示、めあてと対応の振り返りについて共通理解を図り、3種類の提示用カードを揃えた。 ・病弱、肢体不自由CFと連携し、主体的な学びを促す授業をめざし、実践を通した学び合いを研究日、授業づくり日で実施している。(アンケート：授業づくりの工夫・改善につながる…95%) ・研究日、授業づくり日の学び合いとともに付箋アプリや共有フォルダを活用し、実践や意見、自立活動の目標等について全体での情報共有を図っている。(アンケート：様々な意見が共有できてよい…70%) ・希望アンケートをもとに、AI、Canva、電子黒板等の活用やSNSについての研修をICT支援員との連携や選択型も含めて3回実施した。(アンケート：授業や生徒指導等に生かしたい…78%)	B	・鳥養スタンダードの確立に向け、各学部で実践の状況把握をし、学部会や単一・重複会等の機会を捉えて働きかけを行う。 ・研究日の学び合いの充実に向け、学部間のグループ設定やよりシンプルな意見共有の工夫、次単元や他教科等も含めてどのような授業改善、変容につながったのかの振り返り等を試みる。 ・ICT活用の研修での学びが具体的にどのような実践につながっているか、ニーズに応じた活用に向けての要望も含めてアンケート等で把握し、ミニ研修の企画やICT支援員との連携、他校の実践や研修の紹介等での効果的な対応を図る。 ・次年度に向け、計画通り研究日で実態把握ツールの活用による目標検討時間を確保できるよう分掌間で連携する。

多様な学びの推進	自立活動部	<ul style="list-style-type: none"> 主体的な学びを実現する授業のサポート 	<ul style="list-style-type: none"> 実態把握として鳥養版Co-MaMeや自立活動チェックリストを活用しているが、実施時期や実施方法が違う。また、自立活動部員の中にCo-MaMeの経験者が少ないため、年度当初からアセスメントの声かけができておらず、サポート体制が不十分である。 研修動画の保存先がバラバラで、動画を再度見ようと思っても、なかなか見つからないときがある。 自立活動室の安全点検は、物品の数が多すぎるため、出入れが大変な物品について点検していない月もある。また、部員も少なくなり、安全点検の実施自体が難しくなってきた。 スヌーズレン室について、教職員からの要望を踏まえ、季節に応じて飾りを変えている。ただ、担当任せになっており、他の部員が同じように仕事ができるとは考えにくい。 	<ul style="list-style-type: none"> 実態把握から目標設定までの手続きの仕方について、教員に情報を提供し、必要に応じて相談にも対応する。 研修動画の保存場所が整理されており、見たい人が見ることができる。 自立活動室の安全点検を例年より少ない部員でできるよう、新しい仕組みを考え、実施している。 スヌーズレン室の物品や飾りについて、自立活動部員の中でおおまかに把握している。 	<ul style="list-style-type: none"> 専門性の高い教員と連携し、実態把握から目標設定までの手続きについて研修を実施する。また、確実に実態把握や目標設定ができるよう、実施時期の前に呼びかけや説明を行う。さらに、年度が変わっても、持続的な仕組みとなるよう、おおまかな年間スケジュールを作成する。(11月まで) 介助職員も見やすくするため、iPadからでも見られるように保存先を考える。研修動画の保存場所を掲示板を通して伝える。 使用頻度の多い物品を中心に毎月点検し、使用頻度の低い物品は、半年に1回確実に点検する。 季節の掲示物を蓄積する。物品の配置について、自立活動部内で共通理解する機会を設定する。(6～7月) 	<ul style="list-style-type: none"> 実態把握及び目標設定についての研修は、自立活動部員以外の専門性の高い教員のサポートにより、実施できた。研修により、目標設定の手続きについての理解が深まった等、参加者より意見があった。ただ、目標設定に関わる年間のスケジュールはまだ作成できていない。 研修動画の保存場所をtoriyo-nasの動画保存用フォルダに一本化し、iPadからでも見られるようにした。研修後、保存場所を掲示板で呼びかけた。 少ない部員で安全点検ができるよう、毎月の点検は副校長や学習支援員にサポートしてもらったり、長期休暇中は自立活動部員以外の職員にも協力してもらい大型の遊具点検を行ったりするなど、点検の仕方を工夫した。点検の時期や対象、方法等、試行錯誤的に行っている。 スヌーズレン室の季節の掲示物は着実に蓄積できている。物品の配置等を共通理解する機会も意図的に設けることで、部員全体で協力体制ができてきた。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 年度が変わっても、自立活動に関する実態把握及び目標設定ができるよう、おおまかな年間スケジュールを作成する。(2月末まで) 自立活動室の安全点検について、実施の時期や方法、役割分担について整理して、R8年度に引き継げるよう資料を作成する。(3月末まで)
		<ul style="list-style-type: none"> 自分らしさや夢を実現する力を育てる豊かな体験活動の実施 保護者(地域)と協力した教育活動の推進 	<ul style="list-style-type: none"> キャリア教育部と分かれたことで仕事の振り分けが発生した。 委員会だけであった本校に児童生徒会が発足して会長選挙なども行うようになったが、生徒数減少などで存続の方法も考えていかなければならない。 わくわくフェスタの実施について部員が中心となって活動していたが、今年度は担当者を振り分けできないために各学部から代表者を出してもらうことにした。学部間の連絡調整をしっかりとする必要がある。 居住地校交流について保護者に通信で啓発してきたが通信を作るのは人数的に難しい。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒会の運営を通して、児童・生徒に学級や学部を解いた集団活動のよさを感じられる経験をする。 生徒の生活の延長線上にある日常での体験活動が充実するとともに、機会を捉えて非日常感のある貴重体験の機会も充実している。 	<ul style="list-style-type: none"> 児生会の活躍の機会を多く設定し、リーダー育成の好循環な流れを作る。 キャリア教育部との内容のすみ分けを考えながら、協力できるところでは情報の共有を図りそれぞれの部の視点から体験活動を生活に生かしていく。 わくわくフェスタや作品展等の機会を通じて、本校の教育活動を広く外部に広報する。 	<ul style="list-style-type: none"> 児生会では新キャラクターの名前募集、今後取り組んでほしいことのアンケート、わくフェスのテーマ決め、オリジナルソングづくりなどを生徒主導で取り組み、学校やみんなのために活動できる素晴らしいリーダーが育成されつつある。クリーンとりようやわくフェスなど全校行事でも中心となって活動しており、後輩たちには、次は自分たちがやってみようという気持ちが芽生えはじめている。先輩も後輩の期待に応えたいという気持ちができるお互いが高め合うよい関係ができている。 オリエンタルランドや芸術鑑賞会など生徒にとって素晴らしい体験ができている。 居住地校交流については懇談で保護者に確認できていないクラスがあった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 児生会の活動は継続。 今後も素晴らしい体験ができるよう計画していく、しかし部員数が少ないので学部や学部外の協力も必要。 居住地校交流は、懇談で文書を使って意志を確認する。
社会と主体的に関わる体験の創と造	豊かな体験部	<ul style="list-style-type: none"> 自分らしさや夢を実現するキャリア教育・人権教育の推進 	<ul style="list-style-type: none"> キャリア教育と人権教育について全体計画を提案、全校でそれをもとに取り組みを進めている。キャリアパスポートや人権教育年間指導計画を作成している。 	<ul style="list-style-type: none"> 教職員がキャリアパスポートを日々の学習活動に取り入れたり、人権教育の視点を意識した授業づくりに取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 学級担任に対して、キャリアパスポートと人権教育年間指導計画の作成や活用状況をアンケートで集約。それを元にキャリア教育部で評価を行う。 電子掲示板などを活用して教職員に対して情報提供や啓発活動を行う。 校内に進路掲示板のコーナーをつくり、情報発信を行う。 「進路だより」を発行する。 保護者との座談会を行い、保護者の思いを聞きながら、進路情報の発信を行う。 就労促進セミナー、福祉セミナーへの参加案内を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 夏季休業中に職員向けの人権教育研修会を開催した。班ごとの話し合い活動も取り入れたことで、子どもの人権・条約の確認や、人権意識の向上につながる時間となった。 人権教育に関する情報を電子掲示板を用いて職員に発信したり、児童生徒向けのパンフレットや職員向けの指導書を配布したりした。 保護者へは職場体験や見学への案内、「進路の手引き」の活用への働きかけ、進路座談会の実施、職員には夏季現地研修、体験活動への巡回同伴を促進し、進路に関する知識や理解を深めることにつながる活動を進めてきた。 啓発したいこと、情報提供したいことを検討し、HPや通信を作成した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き、電子掲示板等を活用して、教職員へ人権教育に関する情報提供を行う。 人権教育参観日を活用して、本校が取り組む人権教育についての情報を保護者や関係者に発信する。 とりようわくわくフェスタやあしあとなどキャリアパスポートを記入する場面に合わせて教職員に確認を行う。 生徒、保護者、職員へ進路関係の体験活動を案内する。 実態に応じて参加促進を行う。
		<ul style="list-style-type: none"> 自分らしさや夢を実現するキャリア教育・人権教育の推進 進路についての情報発信、フォローアップの充実 	<ul style="list-style-type: none"> キャリア教育と人権教育について全体計画を提案、全校でそれをもとに取り組みを進めている。キャリアパスポートや人権教育年間指導計画を作成している。 「進路の手引き」の家庭配布など進路情報の発信に努めている。 	<ul style="list-style-type: none"> 教職員がキャリアパスポートを日々の学習活動に取り入れたり、人権教育の視点を意識した授業づくりに取り組んでいる。 校内での掲示や通信などを活用して、進路情報を発信している。 	<ul style="list-style-type: none"> 学級担任に対して、キャリアパスポートと人権教育年間指導計画の作成や活用状況をアンケートで集約。それを元にキャリア教育部で評価を行う。 電子掲示板などを活用して教職員に対して情報提供や啓発活動を行う。 校内に進路掲示板のコーナーをつくり、情報発信を行う。 「進路だより」を発行する。 保護者との座談会を行い、保護者の思いを聞きながら、進路情報の発信を行う。 就労促進セミナー、福祉セミナーへの参加案内を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 夏季休業中に職員向けの人権教育研修会を開催した。班ごとの話し合い活動も取り入れたことで、子どもの人権・条約の確認や、人権意識の向上につながる時間となった。 人権教育に関する情報を電子掲示板を用いて職員に発信したり、児童生徒向けのパンフレットや職員向けの指導書を配布したりした。 保護者へは職場体験や見学への案内、「進路の手引き」の活用への働きかけ、進路座談会の実施、職員には夏季現地研修、体験活動への巡回同伴を促進し、進路に関する知識や理解を深めることにつながる活動を進めてきた。 啓発したいこと、情報提供したいことを検討し、HPや通信を作成した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き、電子掲示板等を活用して、教職員へ人権教育に関する情報提供を行う。 人権教育参観日を活用して、本校が取り組む人権教育についての情報を保護者や関係者に発信する。 とりようわくわくフェスタやあしあとなどキャリアパスポートを記入する場面に合わせて教職員に確認を行う。 生徒、保護者、職員へ進路関係の体験活動を案内する。 実態に応じて参加促進を行う。
「生きたい」を保障する教育活動・環境の整備	保健安全部	<ul style="list-style-type: none"> 教職員の連携による安全な医療的ケア、個別の緊急時対応の見直し、安全な給食の提供、病院との連携 健康教育(食育・保健教育)、性に関する指導の充実 事故防止・再発防止の徹底 	<ul style="list-style-type: none"> ヒヤリハットレベル0～1の報告件数の増加(令和6年度:58件)した。看護師間での報告・連絡・相談がうまく機能しており、レベル0の事例共有を徹底していた。 教職員間のレベル0～1の報告件数も増加し、レベル2が2件、レベル3以上は発生しなかった。 報告を上げることへの抵抗感を感じていると回答した教職員もいる。 年度当初のケアトークや個々の医療的ケアに応じた研修の開催を行っている。 個々の指示書に沿った緊急時マニュアルを作成し対応を行っている。 教職員アンケートの「給食を活用した指導を計画的に実施できたか」の問いに対して肯定的な回答が65%(令和5年度)→71%(令和6年度)と向上が見られている。 けんこうルームの活用等、児童生徒の実態に応じた食育資料の提供方法について工夫が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ヒヤリハット事例がより報告しやすい環境になる。 ヒヤリハットの共有により、未然の事故防止につながられる。 ヒヤリハット事例について、教員がDBに上げることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 未然の事故防止につながる、ヒヤリハットの共有方法や報告しやすいシステムの検討を行う。(Googleフォームの活用、DBの上げ方の周知等) 医療的ケアが安全に実施できるよう、多職種と連携し校内研修を企画し実施していく。 状況共有のためのツールを工夫し、児童生徒の情報を共有し医療的ケアの充実を図る。 献立に関するひとことメッセージや、食育動画など給食指導のための資料提供の充実を図る。 食育関連行事(食育月間・給食週間)を実施する。 委員会活動(教育企画部)と連携した指導の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ヒヤリハット0レベルや対策等の話し合いが関係者で実施された事例については、教員が直接DBに入力をした。 危機意識の高さや再発防止対策が有効に働いている。一方で、チーム副担任制で複数の教職員が児童生徒と関わる中で事故が起こりうる可能性はある。今後も事故防止や再発防止を継続していける取組が必要。 医療的ケアの課題やリスクについて、教職員からのアンケートをもとに体調を安定させるための対応や緊急時の対応が安心して実施できるよう研修を企画実施ができている。 担任からの聞き取りを実施し、医療的ケア実施時や授業のサポート時に同じ目標に向かって対応を心掛けている。 給食時間の巡回、給食食育時間を増えた。 食育月間は例年同様「しよタイズラリー」を実施した。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 食物アレルギーの対策については、学部を中心に対策を実施する。 職員がDBに直接入力できることについて周知をすすめる。 DBに掲載しているヒヤリハット情報の活用状況の把握をする(分掌部会で確認等)。活用できていない状況であれば、掲示板で周知をする。 引き続き医療的ケアに関することについて教職員からの意見をもとに研修を企画・実施していく。 教職員と連携を取りながら個々の目標が達成できるようサポートしていく。 引き続き方策を実行する。
		<ul style="list-style-type: none"> 教職員の連携による安全な学校生活、個別の緊急時対応の見直し 災害に備えた防災体制の整備 	<ul style="list-style-type: none"> 教職員の防犯体制や災害時の避難について意識はあるが、避難方法については周知が足りない部分もある。 子どもたちが安心して避難できるよう防災ウィークを活用して、常日頃から各児童生徒個別の避難方法や介助人数等を意識し、訓練・校内研修を行っていく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 防犯体制および災害時の避難経路や避難場所、救急体制が確立している。 防災ウィークを活用し、教職員・児童生徒が災害時の避難体制について日頃から訓練、研修を行う。 安全点検を行い、校舎をより安全安心して学習できる場所にするため事務室と連携し、改善・修繕を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 防災ウィークで避難について意識を高めたり、外部機関と連携をとって学校全体での各種訓練を行ったりしながら、避難方法を全体で共有する。 児童生徒の個別の避難方法や介助人数等の情報を共有し避難訓練の充実を生かす。 安全点検であがってきた項目を生かし、事務室と連携しながら設備の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 不審者対応訓練と避難訓練を3回(火災・地震津波・水害)実施した。 防災ウィークの実施や避難訓練によって避難についての意識は高まったが、避難方法の理解が不十分であった。 各種訓練でのアンケートをもとに環境安全部で協議し、課題の改善に向けて取り組んだ。校内施設の見直し、避難経路の安全確認、避難用具の配置見直し、避難用具表示方法の改善等を行った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 全職員へ避難場所や方法を周知徹底する。 防災士の資格をもった職員の助言を参考にして、各種避難訓練のマニュアルにアンケートで出てきた意見を組み入れ改善する。 スクールバスに関わる教職員とのコミュニケーションを密にとり、ミスの起きない体制作りを行う。
		<ul style="list-style-type: none"> 防災物品の整備、情報共有 防犯対策、施設案内の整備 	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度まで防災用物品の整備をすすめてきた。物品は充実したが、取り出しやすさ、消費期限の確認、使用方法の表示など検討が必要。 東玄閣(事務室前)の表示の見直しができておらず、看護専門学校と間違えて侵入する方が後を絶たない。 	<ul style="list-style-type: none"> 保管物品の種類や使用方法について、職員に情報共有されている。倉庫内の物品が探しやすい状態になっている。 東玄閣の施設案内、表示が整備されている。 	<ul style="list-style-type: none"> 保管されている物品の使用方法を確認して、掲示板等を用いて情報発信する。 倉庫内で物品の内容が一目でわかるように表示する。使用期限や消費期限がある物品は表示を行う。保健安全部、環境安全部とも情報共有を行う。 東玄閣の案内表示について、初めて訪れた人でもわかるような標示方法を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 保管物品の使用方法について、一部の物品については事務室から掲示板で発信を続けている。 倉庫内に保管されている物品の掲示や消費期限の表示を行った。 非常用トイレなど事務室職員も組み立てや使用を行ったことのない防災物品がある。 東玄閣は他施設と間違えて訪問する人が一定数いる。来客対応の後、内側の自動ドアを事務職員が閉め忘れている間に、すり抜けて校内に立ち入る場合もある。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 発電機や非常用トイレなどを避難訓練などの機会をとらえて、実際に使用したり、組み立て方法を確認する機会を設定する。 東玄閣の内側自動ドアは現在事務職員が手動スイッチで開閉している。閉め忘れが多いため、通用口と同様に、一定時間経過した後に自動で閉まるようにする営繕工事について検討する。
主体的な生き方を支える支援体制・連携の強化	支援部	<ul style="list-style-type: none"> 校内支援、教育相談体制(外部との連携)の強化、支援ツールの活用 生徒指導の充実 センター的機能の充実 ほっとルームの効果的な活用 支援ツールの活用 	<ul style="list-style-type: none"> 関係機関との連携について全職員に対して説明の場を設けているが、教職員に十分に周知されていない。 生徒指導ミーティングにSC、SSWが参加することで、様々な視点から支援の在り方を検討することができている。SSWが交替した。 一昨年度から学校生活アンケートを取り始めた。ハイパーQU、きもちメーターと合わせて効果的な活用方法を模索中である。 地域の学校や関係機関に向けて、引き続き、本校についての啓発と理解を進めていく必要がある。センター的機能として、相談内容に応じた支援や情報提供はできた。継続した支援につながるケースも出てきている。 中学部や高等部を中心に、登校が難しい児童生徒に対して段階的な支援ができていく状況がある。Co-MaMe等のアセスメントツールやほっとルームを活用していきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 支援に関する会議実施後、参加者全員が具体的に取り組むことがわかり、児童生徒の生活に変化が見られている。 アンケートやアプリ等を活用しながら生徒の心の不調、いじめ等を早期に発見し、各学部やSC、SSWと連携して情報共有、早期対応ができている。 相談支援について、校内、校外の人的資源を活用し各ケースに対応できている。心の問題についてはCo-MaMeを活用した実態把握ができている。 	<ul style="list-style-type: none"> 会議の記録方法や記録用紙を見直すことで、実際の支援につながりやすくなる。 相談のあったケースについては支援部を中心に複数で検討する場を設ける。必要に応じて外部専門家に相談する。 計画している学校生活アンケートや生徒指導ミーティングを確実に実施して、担任、各学部やSC、SSWと連携して情報共有する。 地域支援においてはケースの内容に応じてアセスメントツールを活用し、それを踏まえた助言を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 会議の最後に「誰が」「何を」するのかを必ず確認するようにした。事後の児童生徒の様子を観察すると変化が見られている例もあるが、内容全てが生かされているとは言えない。 ケース会議では、「誰が」「何を」するのか明確にした。事後のシートはまだ活用できていないため、活用することで具体的な児童生徒の変容へつなげていきたい。 計画通りに学校生活アンケートや生徒指導ミーティングを実施できている。担任・SC・SSWとも連携しながら情報共有、早期対応ができている。 地域支援において病弱教育に関する教育相談があったケースについてはCo-MaMeを紹介し、ケース検討の際に活用するようにしている。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 事後シートの形式や内容、活用場面を再検討する。 地域支援におけるCo-MaMeを用いたケース検討を引き続き続けていく。また、東部地区小・中・高等学校を対象とした特別支援教育研修会でCo-MaMeの紹介をする。

評価基準
 A:十分達成
 B概ね達成
 C:変化の兆し
 D:まだ不十分
 E:目標・方策の見直し
 [100%]
 [80%程度]
 [60%程度]
 [40%程度]
 [30%以下]